

坂田郷土誌

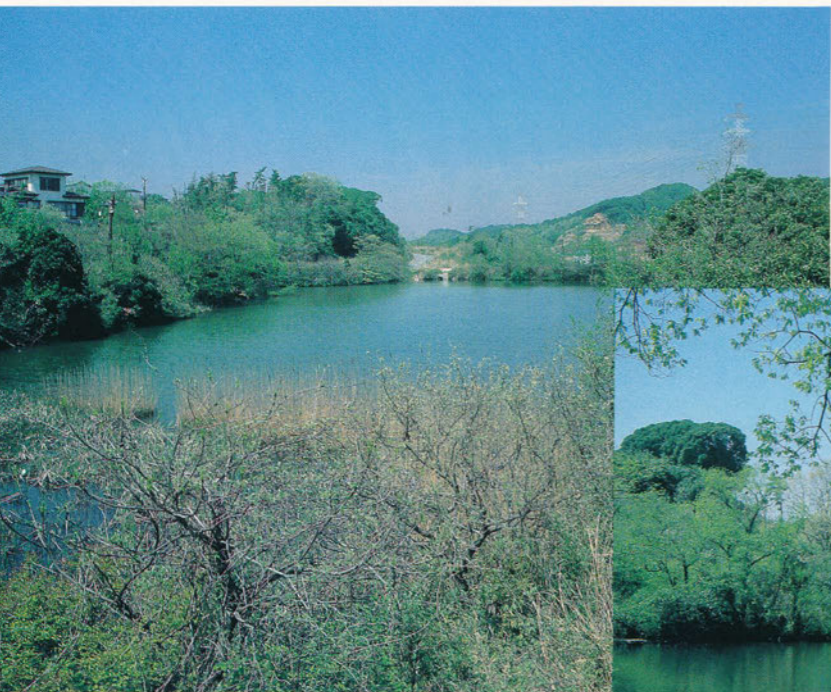
坂田土地区画整理組合



夕映えに立つ (坂田土地区画整理組合記念碑)



坂田全景 (昭和56年 5月)



新関谷 (上関)



大関谷 (下関)



久保南陂水車



久保南陂水車記念碑



土地区画整理前の坂田 (昭和44年 9月)

昭和30年代の海



船出前の一時



潮が引き始めると
網の積込みも忙しい



海苔の種付



坂田漁業協同組合解散記念碑



坂田漁業組合事務所



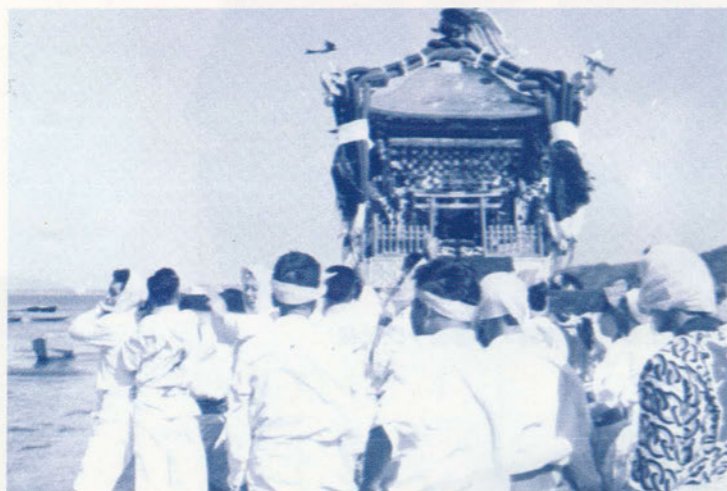
馬出し (斎藤優画)



龍泉山長福寺



御本尊



秋の大祭



坂田浦祭



坂田八幡神社



江戸時代の古地図(元禄14年、坂井五郎家所蔵)



石器(長福寺所蔵)



縄文早期・田戸下層式土器(8000年前・伊藤聖一氏所蔵)



須恵器

平野竹治方出土(長福寺所蔵)



斎藤保方出土長福寺所蔵)

一巻の巻
 松平遠江守
 小笠原帯刀
 書簡

松平遠江守より旗本小笠原帯刀への書簡 (井祐稔家所蔵)

坂田村惣百姓田畑名寄帳
 十月廿日
 寄帳

坂田村惣百姓田畑名寄帳 (写) (秋元晋家所蔵)

納割付帳
 大草三右衛門
 大草三右衛門
 文化十一年

納割付帳 (坂井五郎家所蔵)

納割付帳
 坂田村
 納割付帳

控
 大草三右衛門
 控

村役人から大草三右衛門に差し出した詫び状 (控) (秋元晋家所蔵)

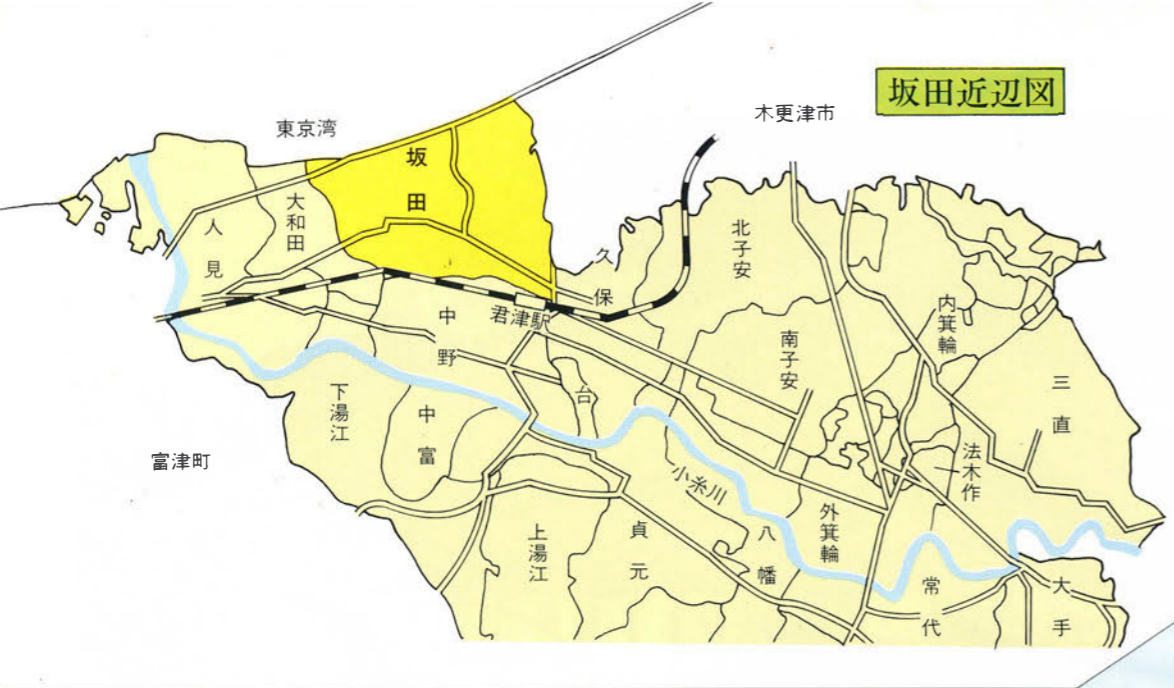
土地讓渡証
 大草三右衛門
 土地讓渡証

土地讓渡証 (井祐稔家所蔵)

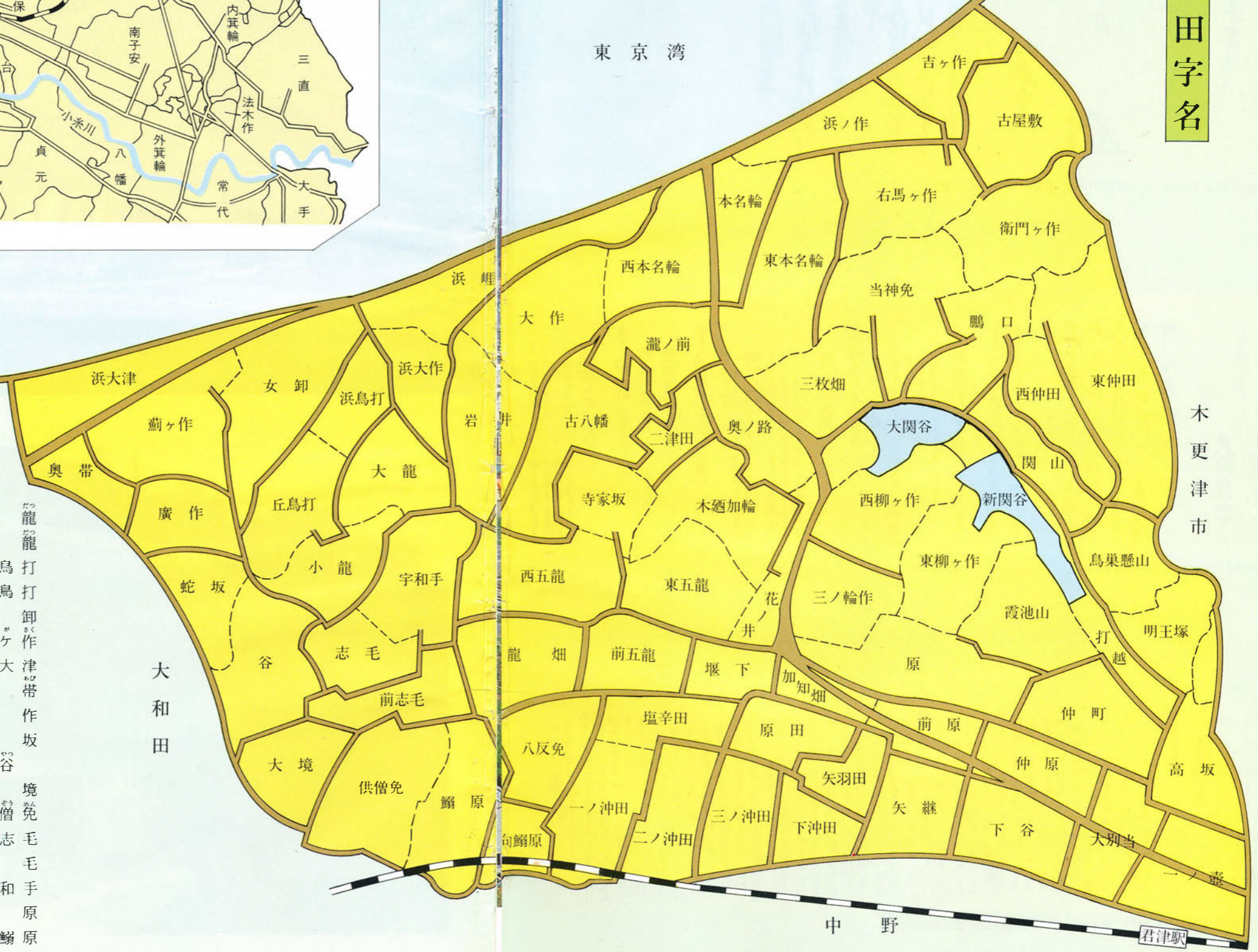


関谷修築絵図 (坂井五郎家所蔵)

坂田近辺図



坂田字名



●坂田字名

- | | | | | | |
|------|----|----|------|-----|----|
| 吉ヶ作 | 二津 | 田坂 | 西柳ヶ作 | 大龍 | 龍打 |
| 浜ヶ作 | 寺家 | 八幡 | 東柳ヶ作 | 小龍 | 鳥打 |
| 右馬ヶ作 | 古八 | 作峠 | 原 | 宇和手 | 打卸 |
| 古屋敷 | 大浜 | 作 | 前羽 | 志毛 | 津帶 |
| 衛門ヶ作 | 浜大 | 井 | 下矢 | 前志毛 | 津帶 |
| 当神免 | 岩五 | 龍 | 仲大 | 大境 | 坂 |
| 鵬口 | 西八 | 免 | 一ノ | 大境 | 境 |
| 東仲田 | 一ノ | 沖田 | 高 | 大境 | 境免 |
| 西関谷 | 二ノ | 沖田 | 仲 | 大境 | 僧志 |
| 新関谷 | 三ノ | 沖田 | 霞 | 大境 | 僧志 |
| 三枚畑 | 塩前 | 龍下 | 打 | 大境 | 志 |
| 東本名輪 | 東 | 田 | 明 | 大境 | 宇 |
| 本名輪 | 原 | 畑 | 鳥 | 大境 | 鰯 |
| 西本名輪 | 加 | 原 | 大 | 大境 | 向 |
| 瀧ノ前 | 三ノ | 輪作 | 龍 | 大境 | |
| 奥ノ路 | 原 | | | 大境 | |
| 本名輪 | 加 | | | 大境 | |
| 東本名輪 | 原 | | | 大境 | |
| 右馬ヶ作 | 原 | | | 大境 | |
| 吉ヶ作 | 原 | | | 大境 | |



坂井五郎氏住家(天保9年)



安藤陽氏住家(江戸末期)

発刊にあたって

永い間の惨苦にみちた悪夢のような戦争が終わったのは昭和二十年八月十五日であった。坂田から出征した若い男たちは内外の戦場や駐屯地から次々と帰郷してきた。そしてある者たちは日本のために戦死し、二度とふたたび帰らなかつた。そのときの実感のままに杜甫の詩「国破れて山河あり」、東京や大阪、名古屋は荒廢した焼野が原となっていた。

しかし、幸いにも私たちの郷土・坂田は、それぞれ生活の苦しみを内面に秘めながらも、その姿は昔のまま変わりがなかつた。どこの家並も、収穫の終わった田園の風景も記憶のままであった。変わったといえば幅広い道路が田圃の中央を東西に横断してできていたぐらいだった。

坂田に大きな変化がやってきたのは、昭和三十年代の後半、千葉県施策による工業化の波が押し寄せてからである。昭和三十六年に君津漁業協同組合は漁業権を放棄したが、慎重を期した坂田漁業協同組合も熟考の末、ついに漁業権を放棄し、海との袂別を余儀なくされたのであった。

坂田は急ピッチで変わりはじめた。百年以上も住んでいた古い家々が連鎖的に建て替えられ、一方、海岸は埋め立てられ製鉄所とその工場群がまたたく間に建設されていった。生活様式も用具も一新し、坂田の歴史を物語る資料も数多く雲散霧消してしまった。

漁業権の放棄によって、坂田の人々は生活と職業の不安にかられ、そして戸惑い、悩みの時代が幾年かあった。

私たちが昭和四十四年にはじめた土地区画整理事業は、工業化、都市化の必然性から、起こるべくして起こった事業であった。明治御一新にも、太平洋戦争でも変わることもなかった坂田の田園風景と海苔養殖業に賑った海は、ここで大きく変容してしまい、ほとんどの家々が、新改築されてしまった。

雨あり、風ありの土地区画整理事業は、地権者全員の協力で、ようやく終わりに近づいている。そんなある日、記念事業の一つとして、坂田の出来事、歴史をまとめたかどうかという意見が出され、昭和五十三年の早春、全員一致で郷土誌編集委員会が発足した。選ばれた委員たちは菱田忠義先生のご指導を得て、責任者・坂井清治氏の幅広い知識のもとに団結して資料収集に東奔西走した。

「坂田はずいぶん変わりましたね、何年ぶりかで訪れると昔、自分が住んでいた場所がすぐには解らない」

坂田から他の地へ出て行った人々の言葉である。発展して素晴らしいという

讃辞の反面、その言葉には昔を懐かしむ心情が潜んでいることはいうまでもない。

失った郷土の往時の姿はもう二度とは帰ってこない。そして先人を偲び、これを後世に残したい考えから、この「坂田郷土誌」が生まれた。各委員のなみなみならぬ日夜の編集努力、資料を提供して下さった坂田内外の方々に深く感謝する次第である。また業なかばで他界した編集委員・坂井俊雄君の冥福を祈りつつ、坂田土地区画整理事業の記念誌がここに完成したことを、発刊にあたってご報告申しあげる。

昭和五十六年十月

坂田土地区画整理組合

理事長 坂井 五郎